

---

# 壁の穴から

石子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

壁の穴から

### 【著者名】

石子

### 【ISBN】

N5728D

### 【あらすじ】

わたくし、その一部始終を見てしまったのです。壁に開いた穴から。言い争う声が気になり、部屋を覗いた時に聞いた会話は……。

わたくし、その一部始終を見てしまったのです。壁にあいた穴から。

その穴は本当に小さくて普通ならなかなか気付かないのでしょうか  
けれど、部屋の中から漏れてくる光によつてたまたま気付いてしまつたのです。

あら、でも勘違いしないでくださいまし。わたくし、いつもそんな風に部屋を覗いているわけではありませんのよ。でも中から聞こえてきた大きな声に、好奇心がわいてしまつたのです。

「お前は、『のわしを陥れよ』<sup>おとしこ</sup>うどこのか！？」

それは、この屋敷の『ご主人様の声で』<sup>ござこ</sup>ました。随分と苟立つておられるようです。

そして、『ご主人様に向かい合つよう』<sup>おとしこ</sup>うに立つて『いるのは最近この屋敷の手伝い』<sup>おとしこ</sup>に入つたばかりの若い娘で『ござこ』ます。

「陥れるなんてとんでもない。ただの忠告ですわ」

娘は、澄ました顔で言いました。まるで『ご主人様の気持ちを逆な』<sup>おとしこ</sup>うにして楽しんでいるように聞こえます。

ほんとうに最近の若い子は礼儀を知りませんわね。

しかし、一体なんの話をしているので『ござこ』ましょ？

わたくしは思わずまた耳をそばだてて会話の続きを聞いてしまいました。

「忠告だと？　ふざけるな！　わしが妻を殺した、なんていう根拠のないくだらん話を持ち出しそつて！　そんなことを言つたためにうちに働きに来てるわけじゃあないだろう！？」

「根拠ならありますわ。病院で働いている私の友達が、『ご主人様が先生のところにこつそりとおいでになつて毒薬をわけてもらつていたのを目撃したそうですわ

「そんなもの、その友人とやらの勘違いだ！ もし、本当だつたと  
してもそれが妻を殺した証拠になどならん！」

わたくし、息を飲んでしまいました。一人が話しているのは、昨  
年亡くなられた奥様のことではありますか！

もともと病弱な方でしたがある時急に体調が悪化しはじめ、二ヶ  
月くらいで帰らぬ人となられました。衰弱がかなりのスピードで進  
んでいたのが端からもわかり、わたくしも奥様の苦しそうなお顔を  
見るのが辛かつたものです。

……この娘は、奥様が亡くなられてから通いはじめましたので面  
識はないはずでございますが……。

「ご主人様。私ももちろんそれだけであなたが奥様を殺したなんて  
決め付けるつもりはありませんわ。……奥様が生前いつも使つてお  
られた食事の時のお皿を調べさせていただきましたの。少しですが、  
毒物の反応がありましたわ。毎日の食事の中に毒を混ぜておられた  
のではないかしら？」

沈黙が訪れました。

わたくしの中で、まさかそんなことはないだろ？といつ気持ちと  
ひよつとしてと思う心がぐるぐるとまわつております。

確かに、奥様が亡くなられたことで婿養子であるご主人様が財産  
を手に入れることになり、殺人ではないかという噂があつたことは  
存じておりますが……。

「ふん。まだそんなものを残してあつたなんてな。皿に毒物の反応  
があつたことは初耳だ。だが、わしがやつたという証拠にはならな  
いだろ？」「う

沈黙を破つたのは、声を搾り出すよつに咳いたご主人様でござ  
いました。

「ええ。ただ、その事を警察に知らせることもできると申し上げて  
いるんですよ。面倒なことにならないうちに私に口止め料をお支  
払いになつたほうがいい、という忠告をしていくんですわ」

娘は楽しそうな笑顔でそんなことを言いました。

「ご主人様はというと苦々しい顔で黙つておられるのです。

なんてことでしょう！」

何もおっしゃらないのは、娘の言つたことが事実だと認めゆよつなものではございませんか！」

「明日まで考えさせてくれ。金を用意するにしてもすぐには無理だ。それにちょっと頭を整理したい」

最初の勢いはどこへやら。ご主人様はそんな事を小さな声でおっしゃいます。

ああ……。わたくしも実を言つと想ひ当たることがあるのです。奥様が亡くなられて間もないころ、普段は近づくことすらない台所にご主人様がこつそり入つて行かれるのを偶然見かけたことがあります。

今思うと、少しずつ食事に入れておられた毒を処分しに来られたのでしよう。

「わかりましたわ。明日までお待ちします」

娘は勝ち誇ったよつて言つたと、悠々と部屋を出て行けりドアの方へ歩み寄つて行きます。

その時……

一瞬の出来事でござりました。まばたきする間もなかつたよつて思ひます。

「ご主人様がすぐ近くにあつた置物を手に取り、娘の後頭部に勢いよく振り下ろすまでは。

「ござり……」

という恐ろしい声が聞こえ、娘はあつけなくその場に倒れて動かなくなりました。赤い血が絨毯に染みをつくつて広がつていきます。わたくしは、ただただその光景を眺めておりました。

ご主人様は肩で荒い息をしておられます。その時ふと、わたくし

のおります方の壁に目線を移されました。

視線が、合つたように感じましたがそんなことあるはず『やれこません。

『ご主人様はしばらく彼女を見下ろしたまま立ち去へしておられましたが、ハツと正気に戻られたのか、娘の体を起こし様子を確かめておられます。

もう、生きてるわけ』『やれこませんの』。

それから『ご主人様がなさる行動はわたくしには分かりきつておりました。

恐らく、この部屋の壁の一部を壊してそこに死体を押し入れ、上からセメントで塗り込めてしまわれる事でしょう。誰にも見つからないように……。

わたくしが、『ご主人様が隠れて台所にいらっしゃったのを目撃してしまい、殺された時のよう』。

きっと、わたくしがおります場所のすぐ側の壁を壊しにかかれるのでしよう。

ここに壁は塗り直しても判りにくいトザインで『やれこますから。ただし、この壁の穴がなにかのはずみで塞がれてしまわないことを願いながら、わたくしはまたしばらく眠ることにいたしました……』。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5728d/>

---

壁の穴から

2010年10月8日15時14分発行